

# 確立操作概念の有用性と問題点

長谷川芳典

(岡山大学文学部)

本シンポジウムでは、確立操作概念の有用性と問題点を掲げ、特に食行動場面における位置づけについて論じることとしたい。

## 1. 確立操作概念導入の有用性

まず基本的な利点として、行動が頻繁に生じている時、それをひっくるめて「動機づけられている」とせずに、強化の随伴性や、弁別刺激の有無、オペラダム、そして確立操作というように、関与している諸要因を分離し、制御可能な形で具体的に記述できる点をあげることができる。

第二に、最近では、確立操作が好子になるかどうかを判断基準として、「寒い時にストーブのスイッチを入れるのは、好子（暖気）の出現ではなく嫌子（寒さ）の除去の随伴性である」とする見解や、ルール支配行動において、「ルールとは、そのルールに従わないことを嫌子にするような確立操作（である）」と考える立場が現れるなど [いずれも杉山他(1998); Malott et al.(1997)], 別の視点からの有用性も高まっている。

## 2. 確立操作概念導入の問題点

まず定義上の不一致を指摘しておく必要がある。例えば Michael(1982, 1993)の定義と Malott et al.(1993, 1997)の定義にはいくつか異なる視点があるし、同じ Malott et al.の著作の中でも sensitivity(感受性)とか弁別刺激が定義の中に含まれていたりのちに外されていたりするなど、定まらない部分があるように見受けられる。

次に、強化操作との完全に独立でないという問題。例えば餌で強化する場合、強化を繰り返せば結果的に飽和化が生じる。要するに、確立操作と完全に独立した強化というのはいり得ない。

上記 2 つの問題はさらに、行動分析学用語における、物理的定義(手続的定義)か、機能的定義

(制御変数的定義)か、という区別に絡む混乱に進展する。但しこれは確立操作に限った問題ではない。「条件刺激」、「強化子」、「弁別刺激」全般について再考する余地が残っている。独立変数操作の記述において、従属変数レベルの変化を定義に取り込む概念は混乱を招くように思う。

そのほか、行動内制的随伴性においては、定義上、行動と独立する形で強化子の提示頻度を変えることはできない。その際の確立操作をどうとらえるかという問題も残る。

## 3. 食行動場面における確立操作

食物は最もポピュラーな生得性好子であると思われるが、食べ物の好き嫌い、「食欲」増進のメカニズムなどを考えるとそう単純でないことに気づく。

2.に述べた定義上の不一致問題と連動するが、TVのCMや、レストランのサンプルケースを眺めて特定の食物を「食べたくなる」という現象は確立操作にあたるのか、弁別刺激提示にあたるのか、パヴロフ型の何らかの条件反応の出現と考えるのかについて、詳細に検討する必要がある。

食物嫌悪条件づけ操作は、形式上、その食物の好子としての強化力を弱める効果をもたらす。これはそれ自体確立操作と言えるのか、それとも、吐き気などの条件反応が生じることによる間接的な確立操作になるのか、重要な問題である。

雑食性の動物においては、食物は必ずしも生得性好子とは言えない。また、その強化効果は、栄養分の補給以前の段階、つまり食物を手に入れる段階あるいは口にする段階の刺激提示内容に大きく作用される。これらをふまえて、食物の何が行動を強化するのか、その際の確立操作は、どの部分を変える操作にあたるのかについて、より詳細に検討をすすめる必要がある。